HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本の社交ダンスにおける上演作品化に関する舞踊人類学的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	井上, 淳生
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12341号
Issue Date	2016-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62468
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Atsuki_Inoue_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　井上　淳生

審査委員　主査　教授　桑山　敬己
副査　教授　小田　博志
副査　教授　瀬名波　栄潤

学位論文題名
日本の社交ダンスにおける上演作品化に関する舞踊人類学的研究

本論文は、明治初期に導入された日本の社交ダンスを事例に、特定の舞踊が異文化に移植されたときに生じるさまざまな変化を検証し、日本では蓄積の少ない舞踊人類学の分野で民族誌的および理論的貢献を目指したものである。

本論文の第一の成果は、「参加から提示」という従来の分析枠組に、「上演作品」という新たな概念を付け加え、舞踊人類学に大きな理論的貢献をしたということである。従来、舞踊変化の研究にはナハチェフスキーの「参加／提示」というモデルが広く用いられてきたが、両者の関係を参加者の視点から分析したものはほぼ皆無であった。日本の社交ダンスを事例とする本論文は、「参加型から提示型へ」という一方向的な観点による従来の研究に対して、上演作品という新たな視点を導入して、商業主義と結びついた上演作品としての舞踊が、競技会や発表会以外の社交ダンスのあり方を周辺化し、参加型への回帰を困難にする状況を明らかにした。

本論文の第二の成果は、日本の社交ダンスの変化を実際に経験してきた人々（高齢者の愛好家、教師、演奏家など）を主な対象として、男女２人１組を基本形態とする「異文化」としての社交ダンスが、日本社会で正当な地位を獲得する過程を明らかにしたことにある。具体的には、世界各地に起源を持つ男女２人１組を基本とする複数の踊りが、イギリスで社交ダンスとして標準化されて日本にもたらされた後、男女の身体接触にまつわる社会的規範や法規制を背景に、上演作品としてその姿を変えていく過程を明らかにした。特定の舞踊が発祥地やそこに住む民族から離れ、異なった文脈で一つの上演作品に昇華するという事例は日本以外にもある。グローバル化時代にあって、その分析は舞踊研究にとって重要な課題である。だが、既存の研究は特定の民族や地域と結びついた舞踊実践の分析に焦点をあててきた。井上氏はその点を批判して、発祥地から離床した舞踊がどのような文脈でどのように受容され発展したかという問題を、上演作品という観点から分析したのである。

本論文の第三の成果は、それが当事者による研究だという点にある。井上氏は学生時代に全国大会レベルの選手として活躍し、卒業後はプロの教師として社交ダンス界に身を置いた。その経験を最大限に生かして、井上氏は東京・大阪・北海道のダンス教室およびホールで数年間にわたるフィールドワークを行い、さらに発祥地のイギリスにも足を運んで現場を調査し、大英ダンス教師協会で文献調査も行った。これらすべての過程で、井上氏の当事者性が有利に働いたことは言うまでもない。当事者の場合、研究対象との距離の取り方が問題となるが、井上氏は結論部で、社交ダンスが上演作品化する過程で社会的正当性を獲得した反面、そこから逸脱する踊り方――その典型が楽しむための踊りである――が異端視されたり、周辺化されたりする現実を冷静かつ客観的に指摘している。なお、世界的に見ても舞踊人類学者の多くは自らダンスの実践者であり、この分野における身体知の重要性を示している。

本論文の第四の成果は、日本ではほぼ手付かずの状態にある舞踊人類学に取り組み、蓄積が多い英米の文献を整理・紹介して、そのなかに日本の社交ダンス研究を位置付けたことにある。本論文は、英米の独壇場であった舞踊人類学に日本から一石を投じたもので、きわめて意欲的である。将来的に、日本の舞踊人類学における先駆的研究として高く評価されるであろう。

その一方で、本論文にはいくつかの問題もある。たとえば、上演作品という新たな概念は、日本の社交ダンスにのみ適用可能なのか、あるいは国外の社交ダンスにも適用可能なのか、さらには国内外の他の舞踊にも当てはまるのかといった問題について、十分論じられていない。また、社交ダンスの受容における日本的特殊性なるものは、本来、発祥地のイギリスやその他の地域、とりわけ文化的に近い東アジア圏との比較によって明らかにされるべきだが、その点に関する議論が十分に展開されていない。しかし、これらの問題を検討するためには大がかりな通文化研究が必要とされ、日本に焦点を当てた本論文の射程を超えている。よって、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上に基づき、本審査委員会は、本論文に示された井上氏の研究の成果を高く評価し、全員一致で本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものとの結論に達した。